きずな

第9号

2015年10月

＜発　行＞
泉南市人権啓発
推 進 協 議 会

非核平和の集い

8月23日（日）、文化ホールにおいて非核平和の集いを開催し、映画「望郷の鐘」を上映しました。

毎年8月は、非核平和の集いをはじめ、ビデオ上映や平和展などさまざまな取り組みを行っています。しかし、昨年は集いへの参加者が少なく、「平和への意識が薄れてきているのでは。」「せめて年に一度、平和の尊さについて考える日があってもいいのでは。」という世の中の風潮を心配する声が上がっていました。

今年は、戦後70年を迎えた節目の年ということもあり、いつも以上に特別な想いで企画しました。

まずは多くの市民のみなさんに参加していただきたいということで、早くに内容を決め、チラシをつくりました。その後、出来上がったチラシを持って、委員一人ひとりが呼びかけた結果、当日は400人近い方々にご参加いただくことができました。

参加者の感想の中で、「私たち10代が積極的にこのような集いに参加しなくてはいけない。」「二度と戦争が起こらないよう、おかしいことはおかしいと声を出して言う勇気がいる。良心が力によっておしつぶされてはならない。」という言葉が印象的でした。現在を生きる私たちに今、何ができるかをしっかり考えていきたいと思います。

平和のメッセージ

◆◆市民のみなさまから寄せられたメッセージの一部抜粋◆◆

○世界の人々、子どもたちが笑顔であるよう平和に！
○国がどの方向に動いているのか。方向を見定める羅針盤を持とう。
○夜空を仰いで、満天の星を眺めていると、人の世の争い事がとてもむなしく感じてしまうのは私だけでしょうか。
○ありのままの自分が大好き。お互いを認め合える社会づくり。それが平和への小さいけれど大きな第一歩！
○「武器で人は救えない！」この言葉にふれた時、本当にそうだと思った。戦争のない世界が訪れますように！

憲法週間＆男女共同参画週間「市民の集い」

5月31日（日）、文化ホールにおいて、2015憲法週間＆男女共同参画週間「市民の集い」を開催し、映画「マダム・イン・ニューヨーク」を上映しました。

普段あまり見慣れないインド映画でしたが、独特のユーモアあるシーンもあり、夫婦や家族、友情関係の中で、心地いい関係を見つめ直すきっかけとなる映画でした。

映画を観終わった後で…

尊厳という言葉が深く心に残りました。家族間、社会の中であっても人は互いに尊厳の心を持って接しなければならないと思います。私も他人の評価をうのみにしないでその人を見るように心がけています。（50代）

興味を持つことが進歩につながることが分かった。（70代）

「自分を愛することで、これまでと同じ周りの見え方が変わってくる。」この言葉を今後、意識したいと思います。（40代）

自分が自分らしくあるのは難しいと思いますが、とても大切だと思います。勇気を出して自分を出すことで自信が持てるし、内に秘めていた自分でも知らなかった力が出せるものだと、私も最近知りました。（60代）

毎日、生活の中で何気なく悪気なく意識せず身近な人を傷つけてしまうことを当たり前と思わずに、気づくこと、思いやること、認めることが大切だと感じました。（40代）

戦後70年 座談会 ―後編―

語り継ごう　未来の平和を願って…

前回の前編に引き続いて、今回では後編を掲載させていただきます。
【前編でのおはなしの内容】
＊終戦当時のくらし
＊爆撃機のはなし
＊戦争時の学校のようす
＊戦争時にはやっていた歌

【真鍋】褒めるわけじゃないけど、外国人の空襲は京都とか奈良のような文化財とか重要な建物はみんな残してくれてるわね。

【東】大阪城も大部分を残してくれてるしね。

【南】最初は、京都が原爆にねらわれたとかいう話もあったけど。天候が悪かったとかで、小倉と長崎がねらわれたとか。

【司会　柿本】僕たちは、広島、長崎は軍需工場があり、ねらわれたって教わりました。

【石原】僕が聞いていたのは違って、本当は東京へ落とすつもりが、天候が悪くて広島に落ちたとかって聞きましたよ。京都とか奈良が空襲にあってないのは、文化財がたくさんあったからって聞きました。

【真鍋】私もそう聞きました。

【南】それで1トン爆弾ってどのくらいの大きさかわかる？直径６０㎝、ながさが１８０㎝。その鉄の塊が爆発する。それで父親が南海電車にいた頃、不発弾が残ってて、同僚が処理するのにさわったら爆発して…。その人が亡くなってしまった。

南さん（昭和12年西宮市で生まれる。昭和18年に父の実家がある泉南へ移る。国民学校２年生で終戦。）

【司会】みなさんの中で当時一番年齢が上の方は４年生。子どもなりに「この戦争がいつまで続くんかなー」とか、勝ってます、勝ってますって学校で教えられてても、「そうなんかなー」と言った実感ってありましたか。

【小栗】実感なんてないよ。僕らは田舎やったから、男の人みんな兵隊にとられてたし、いつ終わるっていうような話はしなかった。うっかりそういう話をしたら、「おい、ちょっと来い」って警察に引っ張られるよ。

【司会】終わるってことは、勝って終わるしかないと言うことですね。

【清水】戦争に勝てるか負けるかの実感ですが、当時ほとんどの家庭で誰かが戦争に行っている状況でした。だから、勝つか負けるかという話題は触れたくなかった。もちろん子ども心にも勝つと思っていました。親もそういう話はしていなかった。

【司会】そういう話すらできなかったんですね。

【清水】今思えば、その頃は嘘の情報も多かった。でも、それを信じていた。

【南】私の父は電気技師で、昭和１８年までは阪神電車、それ以降は南海電車に勤めていました。だから戦争には行ってないです。

小栗さん（昭和 11 年生。和歌山で生まれ育ち終戦当時は国民学校４年生。）

【小栗】昭和１８年７月に父に召集令状（俗に言う赤紙）が届いて広島県の呉の海兵隊に入隊した。近所の人も大勢集まってくれて日の丸の旗を振りながら約４㎞の道を駅まで見送ってくれた。僕は長男やし母方の伯父さんと電車で和歌山駅まで送って行った。その時伯父が父に向って「命があればまた会えるよ。」と言ったが、その伯父が戦死してしまった。父は呉から岩国の海軍航空隊に配属され、整備兵として毎日トラックの運転をしていた。終戦一週間後に除隊になり、村中で一番早く復員してきた。なので外地には行っていない。

【清水】親父は歳をとっていたので戦争にはいかなかった。一番上の兄、今生きていたら９６歳になるかな。兄は１８歳のとき、赤紙が来て招集されるのではなくて、自分から進んで戦争に行きました。確か志願兵と言っていました。戦争に行ってから、一度だけ家に帰ってきたのを覚えています。大きな膝に私をのせてあやしてくれました。今でもそのぬくもりが残っています。

２９歳で亡くなり、遺骨が届けられました。大きなショックを受けた父の姿も忘れられません。白い箱は軽く本当に骨が入っているのかどうか分からなかった。でも、家族みんなで葬式をしました。

しばらくするとまた遺骨が届けられた。今度は重い遺骨だった。一回目の遺骨と違うので今度は開けて中を見た。確かに骨がいっぱい詰まっていた。本当に兄の骨かどうかは、分からなかったけれど、丁重に２回目の葬式をしました。

【東】私の父の場合、待ち構えていた大群の敵機に急襲され、一瞬（約２０秒）で撃沈され、海の藻屑となり遺骨はありません。

東さん（昭和 17 年生、大阪市で生まれ、終戦当時 3 歳。）

昭和２０年６月７日に空襲で焼け出され、東淀川区に避難後舞鶴から出港、８月８日に戦死している。もう１０日早く敗戦を認めてくれていたら、慌しい父の死も、広島、長崎の原爆投下も無かった。

【小栗】そうや、軍部は我々よりずっとわかってたのに、「まだいける、まだいける。神風が吹くから。」って。

【真鍋】原爆が落ちたんで、もうこれは太刀打ちできないって思ったと思うんですよ。

【南】原爆が落ちる前からわかってたみたい。原爆はアメリカの核やから、せっかく作ったからテストしたように聞いた。初め広島、３日後はまた全然性質の違う原爆を長崎に落とした。

【司会】父親が戦争に行き、家を守っていた母親から教えられたことはありましたか。

【真鍋】この時代の母は、父あっての母だったので、父の言う事がすべてでした。父が、「銃後を頼む。」と言えば、子どもたちを育てることに必死だった。それを守らないとしようがなかった。その日その日を送るために、お嫁に来た時に持ってきた着物を売ったりして、食べるのに必死だった。語っても語りつくせない、終戦当時の話は私がまだ小さい子どもだったから今こうやって話せるけど、母はいつも「昔のことは話したくない。」と言っていた。それだけ苦労していたんだと思います。

【東】私の育ったＪＲ京橋周辺には、ビンゴゲーム、パチンコ等の娯楽施設が多くあり、戦争で夫を失った多くの地方出身の子連れの主婦たちが必死に働いていた。子どもがワルサをすると、唇を震わせて折檻していた、「お父さんが戦死したからバカにされる…。」と言って。

【真鍋】戦争中に銃後を守ってきた女性が、戦後、男性がほとんどいない世の中の復興を支えてきたのでしょう。だからその頃から女性は強くなってきたんだと思いますよ。

【東】戦後３年、私が６歳の夏、東淀川区の小学校教師をしていた母が、中之島の阪大病院で、手遅れの胃がん手術を受け死亡。葬式の時、近所のオバサンたちが「お父さん、お母さんの分も長生きシイヤ…。」と慰めてくれました。

【司会】次の世代に、みなさんの経験を踏まえてぜひ伝えたいことはありますか。

【石原】戦争そのものはあってはならないと伝えたいです。戦争の悲惨さをこれからも伝えていかないといけないと思っています。今は平和ですけどね。

【司会】では、みなさんにお聴きしたいのですが、学校の歴史の授業は縄文時代からはじまり、明治～大正あたりで二学期が終わり、その後は受験になってしまう。一番大事な昭和になり戦争に突き進んでいく時代、そこは試験には出ないので、授業は上の空、そんな気がします。学校で現代史を学ぶことはなく、社会に出てから折りに、聴いたり学んだりする程度です。いろんな話を聴くたびに、「なんで学校で教えへんねん…。」と思います。戦争の過ちがあって、今があるんだ、学校でやらないけど大事なことだと思う。家でもしてくれないし、したがらないですしね。

柿本さん（昭和 35 年生、現在 55 歳）

清水さん（昭和 11 年、岡山県で生まれ、高校卒業後大阪へ移る。終戦時は国民学校 4 年生。）

【清水】教育課程の内容も戦争に関する事は少なかったように思います。

教室で学ぶことも大切ですが、児童が平和の尊さを実感できる機会を与えることが大切だと考え、これまで修学旅行は伊勢でしたが、平成4年から、広島にかえました。原爆ドームや資料館を見学して原爆の恐ろしさを知ると同時に平和の尊さを子どもなりに感じたのではないかと思いました。

泉南市の修学旅行の実態はわかりませんが、本当に平和を願うのであれば、広島に子どもたちを連れていき学習することが大事だと思います。

もう一つは家庭内で平和の尊さを話題にしてほしいものです。親が子どもを思うこころを話題にして欲しいと思います。

堺の生んだ歌人、与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」の詩は実に強烈です。当時あのような詩を発表したことは大きな驚きです。その詩の内容で特に印象深いのは「私は子どもに『人を殺せ』とは教えていない。」という一節です。この詩は合唱曲になり唱われています。唄っても聴いても涙が出ます。親が子どもの成長を願い、命を大切にするという気持ちが痛いほど伝わってきます。そういう細かなことの積み重ねが平和につながるように思います。

【真鍋】我々、その当時の国の方針に、国民としては逆らえなかったが、でもやっぱり戦争はアカンよね…。今後頭において学校・家庭教育も「戦争はいけないんだ、人と人との争いはいけないんだ」と徹底的に教えないかん、と思いますよ。

【東】泉南イオン一階の柱に、「おとなが変われば子どもも変わる。」と貼ってあります。子どもは社会の鏡だと思います。

【清水】子どもをかわいがる、子どもへの愛情とは何か。今の時代、取り違えている場面によく出会います。子どもを立派に育てるには、親はもちろん、すべてのおとなが子どもたちに自信をもって見せられる大きな背中をもってほしいと思います。

【真鍋】戦後に母親しかいなくなって、そして母親が必死になって子どもを育てた時期がありましたが、やっぱり国の宝でもあるけど、我が子は自分の宝やから大事にして覚悟を決めて子育てしないといけないと私は思いますよ。

真鍋さん（昭和 12 年生。終戦は満州で迎え、昭和 21 年、8 歳の時に日本へ引きあげてくる。）

ひととき

春過ぎて 夏来にけらし白妙の 衣ほすてふ　天の香具山

この歌は万葉集に詠まれている一首です。本紙の創刊号に万葉集に寄せられている4516首の歌を、一首ずつ読み解釈していくことの楽しさを書かせていただいたと思いますが今回は、この歌を詠んだ私の大好きな「持統天皇」について少し書かせていただきたい、とペンを取りました。

「持統天皇」とは女帝であり、天武天皇の妃でした。彼女は、先の時代に蘇我入鹿を打ち破って大化改新を行った天智天皇（中大兄皇子）の実の娘（鵜野讃良）でありながら天智天皇の弟である天武天皇（大海人皇子）の元に妃として政略的に結婚させられたのでした。

始めは嫌な結婚でしたが、互いに愛が芽生え、天智天皇亡き後は、夫婦が共に天皇として天下を治めたのでした。

しかし悲しいことに夫の天武天皇が病で亡くなり、二人が共に治めた政治は長く続きしませんでした。

そこで彼女は、次の天皇に自分の息子の草壁皇子を着かせることに決めたのでした、が彼もまた、若くして病を得てしまい天武天皇亡き後、すぐ後を追うが如くに亡くなってしまったのでした。

夫と息子を相次いで亡くしてしまった「持統天皇」はその悲しみからなかなか抜け出すことが出来ずに打ちひしがれていましたが、その頃の世状は、はやり病が起きたり、あちこちで内乱が起きたりで大変に乱れてしまったのでした。

そんな乱世を黙って見ていることの出来なかった彼女は再び「持統天皇」の座に返り咲いたのでした。そして西暦703年に、世のため、人のためにだけ生き抜いた「持統天皇」は精根尽きて果てて、五十八歳の生涯を静かに終えたのでした。

（真鍋　正子）

【司会】私たち人権協でもいろいろなイベントを考えてやってますが、なかなか聴いてほしい人に来てもらえない。いつも同じメンバーが参加してくれ、その方たちは熱心に来てくれて、その方々から広がっていくとは思いますが、そうじゃない人にも来てほしいですね。

石原さん（昭和13年、鹿児島で生まれる。国民学校に上がるまで泉南に住む。終戦時は高石国民学校１年生。）

【石原】昨年、小学校での校区の取り組みで、「ひきこもり」をテーマに講演会をしました。そのことで悩んでいる人もいるかと思います。おそらく来てくれてたらいいんですけどね…。

【司会】今回も「平和」をテーマに座談会をしたわけですが、我々の想いが、どこまでとどいているかつかみきれず、はがゆい気持ちです。

【真鍋】中には「別に無理してきてくれなくても、関心のある方だけ来てくれればいい」とおっしゃる方もあります。それも一理ですが、やっぱり「あの人に誘われたからしょうがなしに来たのよ」っていう人でも、初めて来てくれたら次はまた来てくれるかもという可能性がある。だからリーダーシップをとって、一人ひとりに声をかけることも大事だと思います。一回でも参加してくれたらその回の趣旨が伝わるかもしれませんし、私たちは、一人の人に分かってもらえるよう綿密な計画も立てて、一生懸命しないといけないと私は思っています。「あっ、あの人来てくれてるわ。」ってなったらうれしいしね。

【東】いろいろ難しいところもあるけど、やっぱり辛抱強くやっていくことが大事やわね。一回で終わるんじゃなくて、いろいろな事をやって、それでつなげていけると思う。

【真鍋】そうですよね、それがつながりですよね。それこそが「きずな」ですよね。

【東】私自身も地域の人とのつながりがあって今みたいな活動につながっています。その人に会わなかったら今みたいになっていないと思います。有難いと思っています。

【真鍋】長年させてもらって一つ言えるのは、人が集まる所には「楽しさ」がないといけないと思うんです。「あ～来て良かった。」「嫌々来たけど、今日は来て良かった」という楽しさを感じていただければうれしいと思いますよ。

【司会】今日のテーマ「平和」についても、戦後７０年経ち、戦争の話はもうしないじゃなくて、続けていかなければならないということですよね。

【東】私もそう確信します。父母死後の私自身の生き様を今は未だ語り辛いのですが、戦後７０年を節目とする種々な企画、報道で語り合われております。このことを風化させないでこの節目を軸として以降、戦前、戦中、戦後のそれぞれの体験談を私たちが聞き伝え、語り継ぎ、してゆきましょう。このことが子孫の平和の大切さの一考になり、孫たちを大事に至らせないことになると確信します。

【司会】今後、戦争の時代に生きてこられた方が減っていきます。その世代の人たちが子ども、また孫世代へ伝えていくことも大事ですし、今日のような座談会をきずな新聞に載せ、たくさんの方々に読んでいただくことも大事ですよね。

【南】どうしても語り継ぐことは、その時々で話す人の考え方によって変わってしまうこともあります。映像で残すことも大事じゃないでしょうか。

【真鍋】平和を語り継いでいかなければ、その当時亡くなった方々が浮かばれないと思いますよ。

【東】戦争を知らない世代の方には、今日のような話を聞いてもらうだけでも良いと思う。今日の話もおかしな話をしてるんではなくて、現実にあったことやからね。それで実際死んでいったんやからね。その人たちは何も悪いことしてるんじゃない、戦争もしたかったわけじゃない。その時どうやった…とかじゃなく、今現実、戦争は悲惨ですべての人が傷つくからこそ、二度と戦争はしてはいけないと伝えていきたいな。

【司会】今回の座談会では、貴重なお話をしていただきありがとうございました。今回みなさんのお話は経験されたほんの一握りだと思います。でもそのお話をお聴きし、戦中戦後どれだけ苦しい思いをしてこられたか、少しだけわかった気がします。その中で特に印象に残ったのは、「誰も戦争をしたかったわけではない。せざるを得なかった、一部の上層部が決めたこと…。」ということです。では、今の世の中で、私たち一人ひとりに何ができるのでしょうか。いつのまにか戦争に巻き込まれていたということがないよう、しっかり社会情勢に目を向け、私たちが生きる日本、そして世界の平和は、私たちがつくっていかなければなりません。そのためにも、過去の過ちをしっかり見つめ、そして後世に語り継いで行くことが今を生きる私たちの役目だと思います。

フィールドワーク

去る４月 14 日、企画実行委員会がおとなの社会見学と題して企画、立案したフィールドワークが開催されました。泉南市のいいところ、知らなかったところを再発見でき、有意義な１日でした。

私はフィールドワークをいつも楽しみにしています。長いサラリーマン生活を終えて泉南市の昼間人口に数えられる時間が増えました。泉南市に住んで３０年になりますが、勤務先が遠かったことから早朝に自宅をでて夜遅く帰宅する生活の毎日でした。近所の方と仲良くなれる機会も少なく、まして泉南市在住の方々とは通りすがりに出会う程度で寂しい気持ちをもっていました。

その私に、このフィールドワークは新しい出会いを生み、訪問先の社会勉強とともに、今まで知ることのなかった地域の営みに隠された人々の深い思いを感じ取ることができました。

今回は、地元泉南市の歴史と今を学ぶ機会となりました。泉南市の名所や施設を巡って、詳しい説明を聞きながらゆっくりと思いを巡らすことが出来たことは本当に有意義でした。

訪問先は、砂川奇勝、埋蔵文化財センター、海会寺跡、ごみ処理施設、南部水みらいセンター、大阪府南部広域防災拠点など、普段はあることは知っているが詳しい内容を知らなかった場所ばかりです。

何より、施設の方に説明を聞き、質問もする、そんな時間を十分に準備されていたことに感謝します。

砂川奇勝にて集合写真

私は今、手話サークル・点訳サークルなど市内の活動に参加させていただいています。地域の防災活動にも協力させていただいています。地域を知ることと自分の可能性を知ることが強く結び付いていると実感しています。これからも明るい地域活動に積極的に参加したいと思っています。よろしくお願い致します。（田中　実）

はるかのひまわり

～多くの小・中学校で咲いたよ！～

一昨年、教育委員会生涯学習課のフィールドワークでもらった、震災を風化させないための「はるかのひまわり」の種。昨年、西信達小、中学校で咲かせた種を、阪神淡路大震災後 20 年節目の今年、泉南市内小中学校に配布されました。生涯学習課西本主幹（人権教育担当）のご案内で各学校を見廻りましたが、それは見事に咲いていました。必ずしも「はるかのひまわり」だけの想いとは限りませんが、咲かせたい想いは変わらないと思います。すべてのひまわりが、みんなの想いを繋いでくれると確信します。　（運営委員　東　佑吉）

編集後記

8.9 号と 2 号にわけての戦後 70 年を記念しての座談会、いかがでしたでしょうか。人が話す言葉を記事にすることの難しさを、今回は編集委員一同ずい分勉強させていただきました。これからもみなさまの期待に応えられるように、一同頑張っていくつもりでおります。

（企画実行委員会　編集委員）

校区人権協からのお知らせ

校区人権協では、小学校区ごとに PTA をはじめとするさまざまな市民団体などから構成され、小学校でのコンサートや公演会など、地域のつながりを大切にした「草の根」人権啓発活動を進めています。

【各校区の委員長】

新家校区……薄波 猛兒
砂川校区……山下 直人
西信達校区…柿本 繁雄
一丘校区……岡本 晃
樽井校区……上山 忠
雄信校区……南 弘和
東校区……堀口 朋子

信達・鳴滝校区については、現在調整中です。

発行／泉南市人権啓発推進協議会　住所：泉南市樽井９－１６－１２（人権ふれあいセンター）　電話番号：072－480－2855